

令和 5 年度

高等学校入学試験問題

国 語

受験上の注意

- ◎ 時間……………45分
- ◎ 解答はすべて、別紙解答欄に記入すること。
- ◎ 字数制限のある場合、句読点、カギなどの
記号も字数に入れるものとする。

第一問題 次の【場面一】・【場面二】は、それぞれ小野寺史宜の『ホケツ!』の一節である。これらを読んで、後の問いに答えなさい。

【場面一】

みつば高校（みつ高）サッカー部補欠の高校三年生、大地が、同じくサッカー部に所属していた高校三年生のキング（本名は和元）に会いに来ている。キングは試合中に五失点したことをきっかけに身体能力の高い利実（じみ）にゴールキーパーのポジションをとられ、補欠になったことで練習に来なくなり退部していた。

「大地はさ、ほんと、いいやつなんだな」

「そんなことないよ」

「いや、いいやつだよ」

ほめられてるのだと思った。また A のだと思った。ここまでは。

「それはすごくわかるんだ」とキングは続ける。「マジでスゲえと思うよ。立派だと思うよ。けど、おれはお前みたいにはなれない」

「どういうこと？」

「おれはお前みたいに 注1 五十嵐（いがらし）を持ち上げる気にはなれないってこと」

「おれ、持ち上げてる？」

その質問に答える代わりに、キングはこんなことを言う。

「結果として五十嵐の見る目が正しかったのは認めるよ。利実はいいいキーパーになったし、おれよりずっとうまい。それも認める。だから利実に対してどうこうってのはない。こないだくれたメッセージは無視しちゃったけど、まあ、ない。でも五十嵐は、やっぱ無理だわ。何だろうな。理屈じゃなく、無理だわ。大地みたいに心が広くねえんだ、おれ。五点もとられて負けました、だからフォワードだったやつをキーパーにしてみました、それがうまくいったんでそっちをレギュラーにしました。そんなふうにして

ギョラーを外されて、ヘタなんだからしかたねえなって、ヘラヘラ笑ってらんねえわ。いいやつふりとか、できねえわ」

「それは、わかるよ」

「わかるか？ ほんとに」

「うん」

「口先だけでテキトーなこと言うなよ。わかるわけねえだろ、レギュラーになったこともねえやつに」

鋭い言葉がきた。矢のように、先が尖った言葉だ。

① 中学のときにも、言われたことがある。一字一句、覚えてる。言われるようで、実際に直接言われることはあまりない言葉だから。

中学の部で、試合に負けたあと、ベンチから見ている意見をキャプテンに求められた。だから、言った。攻撃と守備の切り換えがもうちょっと早ければ、とかそんなようなことを。つまり、ありきたりなことを。

すると、同年のフォワードに、舌打ち交じりに言われた。レギュラーじゃねえやつは黙ってりゃいいのにな。そして、そっぽを向かれた。

レギュラーじゃないやつは黙ってるよ、ならまだよかった。はっきりと自分に言われたんだから、言い返すこともできる。謝ることもできる。でもそれさえ許されなかった。べしゃんと **B** 感じだった。

今のキングのこれは、それともまたちがう。キングは、どちらかといえばく側なのだ。そのキングに言われた。衝撃は大きい。キングはアイスコーヒーを飲み、さらに小さくなった水をシャリシャリと噛み砕いた。苛立ちが音に出る。

「悪いけど、おれ、お前みたいなの、いやなんだよ。レギュラーになれねえのに、仲間ヅラして部にいたりすんのは」

ダメ押しという言葉だ。あ、マズい、と思ったときにはもう、矢が胸にグサリと刺さった。ああ、マズいマズい、と思いつつも、ぼくは自分の **②** 胸に刺さったその矢を見てる。見下ろしてる。

レギュラーになれない。それはいい。事実だから。

仲間ヅラ、が効いた。

仲間ツラ、しちゃってんのかな。部に居場所を見つけられたなんて、錯覚だったのかな。同学年にも後輩にも、実は笑われてたのかな。人の心がわかる人。人を思いやれる人。そんなことを二歳も下の女子に言われて舞い上がった、ただのバカ。似た境遇の郷太^{注2}とうまく話せたからといって、こうしてキングにまで会いに来た、史上空前のバカ。それがぼくなのかな。

キングに会って、いったいどうするつもりだったんだろう。自分ならキングを励ますことができるけども考えてたんだろうか。そう。考えてたのだ。三年で唯一レギュラーじゃないけどだからこそ、キングを励ますことができる。唯一その資格があると。それはちがった。むしろ逆だ。ぼくは、今のキングに一番近づいちゃいけない人間だったのだ。

ごめんとキングに謝るつもりで口を開く。
でも。

「ふざけんよ。お前、マジでふざけんよ」

その口から、意とはまったく別の言葉が出た。

大きな声じゃない。早口でもない。妙に落ちついてる。気持ちがしんとしてる。不意に風が止んだみたいに。

キングが驚いてぼくを見る。③ 気配でそれがわかる。ぼくはガラスの大窓の外、見たところで楽しくも何ともない駅の通路を見る。
口はなおも動く。

「いつも特等席で試合を観られて楽しいと思ってるけども、思ってるのかなよ。走りまわらないから疲れなくていいと思ってるけども、思ってるのかなよ。だからレギュラーにはならなくていいと思ってるけども、思ってるのかなよ」

そこまで言って、やっと口を閉じた。閉じたら閉じたで、今度は開かなくなる。

キングと二人、並んで窓の外を見る。

通路を何人かが通った。スーツ姿のサラリーマンらしき人も通った。買物帰りらしきおばちゃんも通った。女子高生も通った。西高の制服を着てるから、高校生とわかる。視線を感じたのか、彼女がチラッとこちらを見る。自分が西高を受け、受かってたら、あの彼女とクラスメイトになってた、なんてこともあるのかな、と思う。そしたらぼくは、サッカー部に入ってなかったのかな。

注³ 自分がレギュラーだなんてうそをつくこともなかったのかな。

「ちがうんだ」とキングが言う。「本気で言ったわけじゃない。大地がどうこうじゃないんだ。おれは大地みたいにやれないってことを言いたかっただけで。悪い。ここ何日か、やっぱ、こう、イラついちゃってさ」

④ 本気で言ったわけじゃない。そうなんだと思う。でもそれは、本気でぼくを痛めつけようとしたわけじゃない、という意味だ。本音ではあるのだと思う。

「とにかく、停学じゃなくてよかった。じゃあ、もう帰るよ」

「ああ。みんなによろしく」

「よろしく言ったら、おれがここに来たことがバレちゃうよ」

「あ、そうか。けど、まあ、いいよ。大地にまかせるわ、その辺は」

イスから立ち上がり、コーヒーの紙カップをごみ箱に捨てて、店を出る。

改札口に向かって歩きながら、振り向いた。

キングはまだカフェのカウンター席に座ってる。

じゃあ、と軽く右手を上げる。

キングも上げ返す。

注1 五十嵐…みつば高校の教師。サッカー部監督。

注2 郷太…みつば高校サッカー部三年生。大地と同じ一人親家庭。プレイを一年生部員でエースの貴臣たかおみに注意されたが直

さなかったため、貴臣と揉めていた。

注3 自分がレギュラーだなんてうそをつくこともなかったのかな…大地は育ての親である伯母さんに、自分はサッカー部のレギュラーであると嘘をついていた。

【場面二】

昼休み中、学校の屋上で大地がサッカー部三年生の悟と二人で話をしている。悟は以前、先輩である大地を差し置いて優先的に練習しようとしたレギュラーで一年生の貴臣たかおみを、大地にかわって叱責したという経緯がある。

「でも、ああいうとき、大地はやっぱり怒っていいんだよ」

郷太にも、似たようなことを言われた。ゴールキーパーの代役をやってくれと五十嵐に頼まれても断ればいいのだと。

確かにそうかもしれない。ぼくは練習台のキーパーなんかやりたくない五十嵐に断り、一年のくせに三年をバカにすんなと貴臣を怒鳴りつけるべきなのかもしれない。そうしてもいいのだと、頭ではわかる。でも心がそれを望んでない。いや、望んでないことはない。だからキングにはああ言った。それで気が晴れたかといえば、そんなこともない。あのときは、最後の最後のところで自分を守る必要があった。自分に刺さった矢を、自分で抜く必要があった。

「おれさ」と悟は続ける。「謝ったついでに、ちょっと先輩風を吹かせちゃったよ。10番のユニフォームを、貴臣に譲った」

「え、そうなの？」

「そう。譲ったというよりは、強引に押しつけた。10番は一番うまいやつがつけるべきだからって。これは三年からの命令だって」

「貴臣は？」

「じゃあ、もらいますって」

貴臣らしい。貴臣らしいし、その前にまず、悟らしい。

そもそも悟は、去年の秋に新チームがスタートした段階で、その10番をほしがらなかった。お父さんがサッカー好きの注4哲てつに自らすすめたりもした。ボランチで10はないだろ、と哲からは言われ、悟しかいないよ、とほぼ全員から言われ、しかたなくつけたのだ。自身が貴臣につけさせるのとまったく同じ理屈で。

「それは、引退するときでよかったんじゃないの？」とぼくは悟に言う。

「^⑤いや。今でいい。何かすっきりしたよ。貴臣が部に入ってきてくれてよかった。あいつになら堂々と譲れる。ほんとはさ、四

月の練習の初日に譲ってもよかったんだ。明らかにこいつのほうが上だってわかったから」

「でも10番は最後まで悟でいいとおれは思うよ。みんな、いざってときに頼るのは悟だし。ベンチから試合を見てるとき、そういうの、すごくよくわかるよ。相手からボールをとって、さあ、どう攻めようってなったとき、みんな、やっぱり悟を探すんだ。みっ高レベルじゃ、^⑥木を見て森も見るなんてことはできないよ。どうしても悟を見る。10番を見る。ほかの十人、みんな、そうだよ」

「慣れてるからだろ。次からは貴臣を見ればいい。そのほうが点をとれる確率は上がる」悟は小さく切りとられた海を見て言う。

「おれさ、今より中三のときのほうがうまかったような気がするよ。体は成長してんのに、技術はまったく伸びてない。^{注5}ユースに上がれなかった時点で、いさぎよくやめるべきだったのかもな」

「でもうらやましいよ。悟はずっとレギュラーなんだから。レギュラーじゃなかったことなんて、ないでしょ？」

「まさか。あるよ。ジュニアユースの初めのころは、試合に全然出られなかった。出られないのは二、三人。そのうちの一人。ずっとベンチ。出ても最後の五分とか、その程度。一年二年とそれが続いてさ、中三のときに、やっとどうにか試合に出られるようになったんだ」

「三年でそれなら、そのジュニアユースのなかでもトップってことだよな？」

「ああ。自分でもちょっと期待したんだよ、このままユースに上がれるんじゃないかって。ダメだった。甘くなかったよ。シヨックだったな。こいつよりはおれのほうがうまいと思ってたやつが上がったりもしたから。今になればわかるんだ、将来性を見るってのはそういうことなんだよ。だからさ、おれ、自分がレギュラーだなんて意識を持ったことは一度もないんだよ。試合に出てたときだって、とてもそんなふうには思えなかった。毎回ひやひやするんだ、コーチに名前を呼ばれるかどうかで。自分がレギュラーだなんてのんきに思えたのは、サッカーを始めたばかりの、小学校低学年のときぐらいかな」

「今は思えるでしょ。このチームで悟がレギュラーから外されることは、絶対はないんだし」

「思えないよ」と悟はあっさり言う。「今さらサッカーでレギュラーになれたとは思えない。何ていうか、もう、大事な時期は過ぎたんだよ」

^⑦意外な言葉だが、ストーンと腑ふに落ちた。ぼくにはとてもできない考え方だ。

注4 哲：みつば高校三年生サッカー部。守備的ミッドフィールダー。

注5 ユース：サッカーの年代別チームの一つ。ジュニアユースで選ばれた者が上がる。

問一 空欄 A にあてはまる語句として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、皮肉られてる イ、けなされてる ウ、買いかぶられてる エ、疑われてる

問二 傍線部①「中学のときにも、言われたことがある。」とあるが、中学生の時に具体的に何と言われたのか。本文中から二
十五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字で答えなさい。

問三 空欄 B にあてはまる表現として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、物を投げつけられた イ、何かで頭を殴られた ウ、冷水を浴びせられた
エ、上から踏みつぶされた

問四 傍線部②「胸に刺さったその矢」について、ここで用いられている表現技法として最も適当なものを、次のア～オから選
び、記号で答えなさい。

ア、擬人法 イ、直喩法 ウ、隠喩法 エ、倒置法 オ、体言止め

問五 傍線部③「気配でそれがわかる。」の「それ」とは何を指すのか。簡潔に答えなさい。

問六 傍線部④「本気で言ったわけじゃない。そうなんだと思う。でもそれは、本気でぼくを痛めつけようとしたわけじゃない、
という意味だ。本音ではあるのだと思う。」とあるが、ここでのキングの「本音」とはどういう思いか。「〜という思い」と
いう形に続くように五十字以内で具体的に説明しなさい。

問七 傍線部⑤「いや。今でいい。何かすっきりしたよ。」での悟の心情として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、貴臣の実力を認めないわけにはいかず、悔しいが貴臣が10番のユニフォームをつけた方がよいと考えている。
イ、もともと10番のユニフォームをつけたくなかったため、自分より上手な貴臣に譲れてほっとしている。

ウ、ジュニアユースの中では自分の力が通用しないことに気づき、自分よりうまい貴臣に夢を託そうとしている。

エ、みっ高でサッカーをすることに嫌気がさしているため、責任重大な立場を貴臣に渡せて嬉しく思っている。

問八 傍線部⑥「木を見て森を見ず」ということわざをふまえた表現である。その使い方として正しいものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、彼は周りの意見に惑わされずに自分の信念を貫くことができる。まさに木を見て森を見ずだ。

イ、妹は発表会で緊張しないように木を見て森を見ずの精神であまり周りを見ないようにしている。

ウ、社長は木を見て森を見ずという考え方で、周りからの評価ではなく、その人の本質を見ている。

エ、悩んでいた後輩に、木を見て森を見ずになっているので広い視野を持つように忠告した。

問九 傍線部⑦「意外な言葉だが、ストーンと腑に落ちた。」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、悟の言葉は意外だったが、悟も自分と同じようにレギュラーになれず悩んでいることを知り安心した。

イ、悟の言葉は意外であり、悟の目標が非常に高いものだったことを知り、距離を感じて呆然とした。

ウ、悟の言葉は意外だったが、悟が貴臣にユニフォームを譲った理由に納得することができた。

エ、悟の言葉は意外であり、悟の気持ち常在に困難から逃げているように感じられ残念に思った。

問十 二重傍線部「何ていうか、もう、大事な時期は過ぎたんだよ」について、次の会話を読み、空欄「X」にあてはまるものとして最も適当なものを、後のア～エから選び、記号で答えなさい。また、「Y」に入る表現を本文中から三字で抜き出して答えなさい。

《会話文》

生徒A 「この小説では、みっ高サッカー部の様々な立場の選手の思いについて描かれているけど、ずっとレギュラーだった悟が自分のことをレギュラーだと思ったことがない、というのには驚いたよ。実力もあつてずっとレギュラーだったのに、なんでそう思ったんだろう。」

生徒B 「そうだね。読んでいくと悟が『もう、大事な時期は過ぎたんだよ』と言ってるから、そこにヒントがあるんじゃないのかな。」

生徒A 「『大事な時期』か。悟にとって大事な時期はいつだったんだろう。」

生徒C 「それは「X」。」

生徒A 「なるほど。その時期を過ぎてしまったから、もう悟にとって本当の意味でレギュラーにはなれないと思ったんだね。たとえ、大地や他のメンバーからレギュラーだと思ってもらっていても、悟はそのことを認められなかったんだね。そんな思いを持ちながらも、自分の仕事はこなしていたんだね。」

生徒B 「そのことについて、大地はそんな考え方はできないと言っているよね。大地は三年生でも唯一ずっと補欠だったけど、ずっとレギュラーになりたいと思っていたものね。」

生徒C 「うん、大地にとっても補欠であることはとても不本意なことだったんだと思うけど、そんな中でも自分のできることを自分で考えて行って「Y」を見つけていたんだと思う。大地は最後まで諦めず、今できることを頑張っていたんだね。」

「X」ア、貴臣が入部してくる前のときじゃないかな。それまでは悟がチームで一番上手だったわけだから、チームの10番として頑張っていたんだと思うよ。

イ、サッカーを始めた頃のことじゃあないかな。そのときはレギュラーかどうか考えずにのびのびとサッカーに向かいあって希望にあふれていたしね。

ウ、ユースのときのことじゃないかな。いつもベンチにいてなかなか試合に出られなかったけど、そんな中で上手な選手を見るのは良い刺激になってったはずだよ。

エ、ユースを目指していたときのことじゃないかな。そのときの方がうまくいったと悟自身も言っていたし、悟にとって勝負どころだったに違いないよ。

第二問題 3年A組の国語では【文章Ⅰ】『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』（山極寿一）を扱

い、授業を行っている。これをふまえて、後の問いに答えなさい。なお設問の都合上、【文章Ⅱ】には段落番号 1 14 を付している。

【文章Ⅰ】

①人間は、もともと自分で自分を定義することができません。ゴリラやチンパンジーとの共通の祖先だった時代から、他者の目によって自分を評価したり意識したりする生き物でした。人間は強い共感力をもっているために、相手から期待されていることを感じ取れるからです。そう考えれば、進化のプロセスを経て、人間の社会が情報化時代に至ったことは理解できます。そのほうが、評価がわかりやすい。

でも、人間は不確かなものです。人間は、数値を見て、好きになったり、嫌いになったりするわけではなく、相手と直接会ってその具体的な姿や行動や表現などを見て、どこかに憧れたり、どこかで拒否したり、共感したりする。王子さまが、貧しい家に生まれた女の子に心を動かされ、身分をわきまえずに結婚するシンデレラ物語のようなことは、おとぎ話の中だけではなく現実にも起こります。

人間と人間との出会いや関係は、決して予測できるものではなく、どういふところで火花が散るかわかりません。それは、人間はそれぞれ、予測がつかないような中身をもっているからです。どう表現されるかは、その時々によって変わり、それを他者は、数値でなく直観で判断します。人間と自然の出会いも、人間と動物の出会いも、動物同士の出会いも同じ。そこで新たな関係が生まれ、別の出来事によってその関係が壊れ、あるいは関係が持続されたり強化されたりする。そこで起こることを100%予測することはできません。だからこそ人間と動物の出会い、人間同士の関係は面白いのです。

この面白さこそが、生きる意欲につながる。そう考えれば、今、人間が見失っているのは、生きる意味だと言えるかもしれない。

なぜ自分はこの世に生まれ、なぜ生き続けているのか。②もともと、この問いを考えるのは哲学の役割でした。哲学は、世界をわかりやすく解釈すること、そして、生きる意味を教えること、という二つの使命を負っていました。しかし、社会の大きな変化

により、^③哲学は二つの学問に乗っ取られてしまいました。

20世紀、哲学は生物学にその地位を譲り渡しました。それまで、人間はほかの生物とは異なる特別な存在であると考えられていました。自然を支配し、管理する権利を神から与えられ、神の姿に似せてつくられた存在だとされていたのです。それが、生物学の登場によって、人間もほかの生物と同じようにDNAという遺伝子によってつくられていることが明らかになりました。つまり人間をつくるのも遺伝情報であり、その情報をいじれば、病気など、人間の抱えている問題は解決でき、身体や性格さえも意のままに変えられるという予測が成り立つようになったのです。

その予測は、まず栽培植物と家畜という形で現実になりました。今、地球の全陸地に占める牧草地、放牧地、農耕地の割合は36%に達しています。そして地球上に生きている哺乳動物の9割以上は人間と家畜です。人間と、人間が手をかけてつくり上げた動物が地球上の哺乳類のほとんどを占めてしまった。今は海の魚にまで人間が手を加えています。このまま行くと、人間の手にかからない生命はなくなってしまうかもしれません。それほどまでに生命をつくり変えた人間は、さらに自分自身も遺伝子編集や遺伝子組み換えによってつくり変えようとしています。神経細胞の間をつなぐインパルス(電流)によって、記憶も思考もすべて解釈できる。心も脳の中にある。生物学はそう断じたわけです。

こうして哲学に乗っ取った生物学は、やがて情報学に乗っ取られます。情報であるDNAを操作すれば、有機物であれ無機物であれ、あらゆるものをつくり出すことができます。生物も、遺伝的アルゴリズムでできた情報の塊かたまりです。人間も同じ。遺伝的アルゴリズムを解釈すれば、いくらでも情報は書き換えることができます。情報として捉えれば、世界の在り方もすべて数学的に解釈ができるわけです。こうして、哲学が人間を定義し、人間の生きる意味を考える時代は終わりました。

生物学に乗っ取った情報学は、人間を知能注1 偏重へんちゆうに変えました。情報学が扱うのは、人間がもつ二つの能力、知能と意識のうち知能の部分だけです。注2 大脳辺縁系おおいんげんけいが司る意識の部分は切り捨て、情報になる部分、つまり注3 大脳新皮質が司る知能だけで解決していこうというのが今の情報革命の中心理念だからです。AIも、知能だけを拡張したものであって、感情や意識の部分をもっていません。人間は、感情や意識を忘れ、知能に偏り始めたことで、本来、決してわかるはずのない「^④好き嫌い」や

「^⑤共感」、^⑥「信頼」といった感情を、情報として「^⑦理解」しようとするようになりました。

かつて人間は、そんなことに悩む必要はなく、意識に従順であり続けられました。意識や感情は本来すぐ曖昧なもので、波のように寄せたり引いたり、霧や雲のように消えたり現れたりします。「好き」という感情を細かな要素に分析しなさいといわれてもできるものではないでしょう。それは、知能でわかるものではなく、感じるからだからです。犬や猫を飼っている人は、考えてみてください。ペットの犬をかわいと思う気持ちは、いくら分析してもわかりません。自分にすり寄ってくる犬の感情は、尻尾を振ったり吠えたりする様子を見れば感じとれますが、何がその感情を呼び起こしたのか明確に分析することは不可能です。もしかしたら人間の1000倍以上の嗅覚で、人間が無意識のうちに発している匂いを感じとってそれに反応しているのかもしれないが、それはわかりません。確かなのは、お互いにそういう感情が湧いたという事実です。五感の異なる動物と100%わかり合おうというのは無理なことです。それでも、飼い主として一緒に暮らしていれば、彼らが何をしたいのか、わかることも多いですよ。曖昧なものを曖昧なままで了解し合うのが動物たち、特に異種間のコミュニケーションなのです。それで両者に不自由はありません。

こうしたペットとの関係を、かつて人間は人間同士でも結んできました。相手の心を明確に知ることはできないけれど、了解できるものはある。その了解できるものが自分と相手の間に横たわっているからこそ信頼関係が生まれます。信頼関係をつくるのは言葉ではありません。言葉は代替物であって、信頼関係へのリアルな架け橋になるのは、それ以外の五感の中、正しくは、五感を感じられる身体の中にあります。それを、言葉でうまく代替して空間を広げるのが人間的な社会のつくり方であって、その際、身体が感じた「曖昧なもの」は曖昧なままにしておいていいのです。

ぼくたちは、そういう世界にずっと生きてきました。そこで幸福やら喜びやらを抱き、一方で憎しみや嫉妬といった負の感情を、他者の助けも借りて解決してきた。それが人間の社会性だったわけです。

情報学に乗っ取られてから、人間はどんどん分析的になり、すべてを情報化しなくては気が済まなくなりました。人間は、感じたことで衝動づけられたり助け合ったりします。あるいは、食卓を囲んで楽しい思いをしたり、踊って興奮したりする。こうした感性の部分は情報化できません。たとえ情報に還元したところで、表面的な情報にしかならないでしょう。そして今、⑧「わかる」とすることがわからないことにつながる」という矛盾が生じています。情報化するということは、わからないことを無視すると

いうことです。それは、隠されているものを捨てていく作業だからです。人間は、情報化することで逆にバカになってしまいました。

⑨ 共感というのは「相手の気持ちがわかる」ことです。それを、「相手を理解すること」だと誤解している人たちが、多いように思います。相手を「理解」するのではなく、⑩ ただ「了解」することが、互いの信頼関係を育んだり、好きになったりする架け橋になるということがわからない。同調する能力があるにもかかわらず、それがお互いの信頼関係を育んだりすることもわからない。さらには、他者の自分に対する感情や、他者に対する自分の感情が、「好き」という言葉で表される感情に匹敵するものかどうかの判断できないのです。

その不安が、身近な人への過度なこだわりや要求となり、それがいじめや嫉妬、暴力につながっているのではないのでしょうか。実際には生み出されていない信頼を、一番近くにいる仲間かじょうに過剰に求めるがゆえに起きている不幸な事件も多いのではないかと思えます。

注1 偏重：物事の一面だけを重んじること。

注2 大脳辺縁系：大脳半球の内側面にある古皮質・旧皮質の総称。本能や情動をつかさどり、新皮質の縁にある。

注3 大脳新皮質：大脳皮質の一部で、人類ではよく発達し、学習・思考・情操などの精神活動が営まれる。

問一 傍線部①「人間は、もともと自分で自分を定義することができません」とあるが、その根拠として**適当ではないもの**を、

次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、人間は他者の目により自分を評価する生き物だから。

イ、人間はもともと他者との強い共感力をもっているから。

ウ、相手から期待されているということを感じ取れるから。

エ、評価がわかりやすい情報化時代を生きているから。

問二 次の会話は傍線部②「もともと、この問いを考えるのは哲学の役割でした」をきっかけに、傍線部③にあるように「哲学

は二つの学問に乗っ取られ」た流れについて話し合った様子です。

《会話文》

生徒X 「この問いを考える学問分野が哲学から生物学、情報学へ変わっていったと書いてあるけど、難しいな。」

生徒Y 「せっかくだからノートにまとめてみようよ。」

(生徒Yがノートを取り出し、書き始める)

生徒Z 「こうしてまとめると、哲学から情報学までの流れがわかりやすいね。」

生徒X 「とにかく、『知能』と『意識』という人間の能力のうち『知能』のみを人間は情報学で捉えようとしたと筆者は考えているんだね。」

(1) 次の表は生徒Yがまとめたノートである。ノートの中の [A]、[B]、[C]、[D] に当てはまる言葉を【文章I】の本文中から抜き出して答えなさい。

<p>哲学 スマホを捨てたい子どもたち 使命 ①世界を分かりやすく解釈すること</p> <p>② [A]</p>	<p>人間はほかの生物と異なる特別な存在 ↑ [B] によって自然を支配、管理する権利を与えられたから</p>
<p>生物学 人間もほかの生物と同じ ↑ [C] でつくられている</p> <p>[C] の情報をいじれば問題は解決できる</p> <p>※解決できる問題…「病気」「性格」「食料」「記憶」「思考」</p>	<p>情報学 [C] を操作すればあらゆるものを作り出せる</p> <p>生物も情報の塊</p> <p>[D] 的に解釈できる</p>

◎人間も情報として理解できるはず

← 「知能」「意識」

(2) 生徒Xが指摘した、傍線部④「好き嫌い」、⑤「共感」、⑥「信頼」、⑦「理解」について「知能」に関わるものには「○」、 「意識」に関わるものには「×」をそれぞれ答えなさい。

問三 傍線部⑧『わからうとすることがわからないことにつながる』という矛盾が生じています」とあるが、なぜそのような矛盾が生じるのか。本文中の語句を用いて四十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部⑨「共感というのは」から始まる段落について学ぶ際、国語の岩田先生は、【文章Ⅱ】「聴くということ」(鷲田清一)をみんなに配った。

【文章Ⅱ】

1 聴くといえ、だれもおそらく、耳で、と答えるだろう。聴覚は鼓膜に伝わる空気の振動を聴覚神経が大腦に伝えて……と、むかし、学校で習った記憶がある。しかし、聴くという行為が、耳でする、ただたんに音響情報を受けとるといふ受動的な行為だとはとても信じられない。

2 たとえば、数名がおなじ部屋にいてもおなじ音を聴いているとはかぎらない。どこからともなく響いてくるBGMを聴いているひともいれば、作文しているワープロのキーを打つ音に神経を集中しているひとや部屋の外の鳥の鳴き声に耳を澄ましているひともいる。後者のひとたちにはBGMの音はほとんど聞こえていない。走る電車のなかにいても、となりのひとと話していると、あるいは本を読んでいると、その轟音はほとんど耳に入っていない。聴くというのは、こちら側からの選択行為でもあるのだ。

3 ひとの話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはもっと選択的な行為である。相手が親しいひとなら、きちんとその言葉を受けとめていないと、「ちゃんと聴いてるの?」「聴く気はあるの?」と問いつめてくる。

4 「愛さないと見えないものがある」と言った哲学者がいる。「愛が認識を基礎づける」という言い方で。「愛さないと」という言い方がちょっと重すぎるとすれば、「相手に関心がない」と言い換えてもよい。

5 聴かれるほうからすれば、相手がじぶんに関心があるのかどうかは、その聴き方ですぐにわかるものである。だからこちらの聴き方次第で、愛されていると感じたり、じぶんのことなんかこのひにとってはどうでもいいのだと感じたりもする。正確に、そして繊細に。だからこそ、対話においてはしばしば、語るほうが先に傷つくのである。逆の言い方をすると、聴くということが選択的な行為であるかぎり、それは何かを選んで聴くことであって、相手が伝えたいことをそっくりそのまま受け取るというの、なかなかむずかしいものだ。そしてそこにじぶんが出る。何を聴くかというところに。

6 聴くというのは、相手の言葉をきちんと受けとめることである。理解できるかできないかは、ふつうおもわれているほど重要ではない。それより話すほうが「わかってもらえた」「言葉を受けとめてもらえた」と感じるほうが重要である。なぜなら、じぶんについて話すことは、じぶんを無防備にすることだからだ。逆に言えば、何でも話せるというのは、相手にじぶんが、いまのままでも十分に、そして（もしあなたがこうしてくれるなら、といった）条件つきではなくそのまま受け容れられていると感じることだからである。「わかってもらえる」というのは、苦しみを「分かちもってもらえる」ということでもあるのだ。ちなみに西欧の言葉で、シンパシーというのは「苦しみを分かちもつ」という意味だ。

7 聴くことの力というのにもそこにある。むかしある新聞で人生相談をしていた宇野千代さんが、いつも「あなたは……だと言うのですね」というフレーズを連発して、相談をもちかけるひとの言葉をほとんどそのまま反復するだけの「相談」をしていたが、その効果もそこにある。相手の苦しみをそれと認め、受け容れることは、それに同意することでも同感することでもない。心をひとつにするのでも、理解できるというのでもなく、言葉をそのまま受けとめるということそのことに意味がある。聴くだけという受動的な行為がケアにおいてはもっとも深い力をもちうるのも、そういうわけである。

8 こころのケアやカウンセリングにおいて、慰めの言葉や助言よりも、「こうなんです」と繰り返して確認することが大きな意味をもつのは、おそらく、そういう語りのなかで語るひと自身がみずからを整えるような「物語」を紡ぎだしていくことになるからである。

9 聴くというのは相手の鏡になろうとすることでもある。その意味で、他者のケアとは、他者のセルフ・ケアをケアすることでもある。

10 語るひとは聴くひとを求めている。語ることで傷つくことがあるうとも、それでもみずからを無防備なまま差しだそうとするのである。ケアにおいてそのリスクに 대응するのは、「関心をもたずにいられない」という聴く側のきもちであろう。「だいじょうぶですか?」「なにかお手伝いできることはありませんか?」。そういう関心が貫いてはじめて、ひとは他人を聴くということが可能になるのである。

11 とはいっても、ほんとうに苦しいことについてひとは話しくいものだ。なかなか話したくないものだ。忘れてしまいたい

ということもある。どのように語っても追いつかないという想いもあるだろう。だから、そこから漏れてくる言葉は、ぶっつ、ぶっつと途切れている。だれに向けられるでもなく、ぼろっと零れるだけ。じぶんにとってもまだ言葉になっていないような言葉、ひとつひとつその感触を確かめながらでないと言葉だ。

12 そういうかたちのなさに焦れて、聴くひとは聴きながらつい言葉を継ぎ足してしまう。ただ相手の言葉を受けとめるだけでなく、「〜」ということなんじゃないですか、だったら……」と解釈してしまう。こうして話す側のほうが、生まれかけた言葉を見失ってしまう。

13 じっくり聴くつもりが、じっさいには言葉を横取りしてしまうのだ。言葉が漏れてこないことに焦れて、待つことに耐えられなくなるのだ。

14 ホスピタリティ、つまり歓待（＝他者を温かく迎えるということ）においては、聞き上手といった素質の問題ではなく、どのようにして他者に身を開いているかという、聴く者の態度や生き方が、つねに問われているようにおもう。

(1) 岩田先生が【文章Ⅱ】を配布したのは、この中のある段落を読んでもらいたかったからである。それがどの段落かを予想した生徒A～Dの発言のうち最も適当なものを、次のア～エから選んで、記号で答えなさい。

ア、生徒A 「6」だと思えます。」

イ、生徒B 「7」だと思えます。」

ウ、生徒C 「10」だと思えます。」

エ、生徒D 「14」だと思えます。」

(2) 最初の【文章Ⅰ】中の傍線部⑩「ただ『了解』すること」とほぼ同じ内容を表す表現を、解答欄「〜こと」に続くように【文章Ⅱ】から二十二文字で抜き出して答えなさい。

第三問題 次の1～5の各文の傍線をつけたカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、保護を名目にして、その地帯のライオンをホカクしているらしい。
- 2、こちらが油断したため、まんまと敵のボウリヤクに乗ってしまった。
- 3、都市のいたるところで、新しい道路のホソウ工事が進んでいるようだ。
- 4、コウカで支払うので、少し時間がかかりますが、よろしいですか。
- 5、あの工場からの廃水によって、川はすっかりオセンされてしまった。

令和五年度 高等学校入学試験問題 (国語)

解答欄

第一問題

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十 X

Y

問七

第二問題

問一

問二 (1) A

B

C

D

(2) ④

⑤

⑥

⑦

問三

問四 (1)

(2)

第三問題

1

2

3

4

5

受験番号	<input type="text"/>
名前	<input type="text"/>
得点	<input type="text"/>

※印欄は記入しないこと

富国